



# 冬眠博士



川崎ゆきお

「妖怪博士」

妖怪博士付きの編集者が呼んでいる。

「妖怪博士、妖怪博士」

「おお」

布団から声。

「冬眠中ですか」

「ああ、寒いのでなあ」

「カギを掛けなくて寝るのは危ないですよ」

「取られるものは何もない」

「そうですねえ」

「まあ、取られると不便になるものもあるが、そんなもの市場では何の値打ちもなかりょう」

「また、妖怪談お願いします」

「寝起きなので、調子が悪い」

「あ、はい」

「今日はまあ、なしだ」

妖怪博士は、まる寝、つまり着替えなくて寝ていたようだ。

「長い昼寝をすとなあ、これが本寝でないかと間違えることがある」

「夜は夜で休まれるのでしょ」

「寝ることは寝る。十分な」

「はい」

「そして、昼も寝る。この時間帯は起きている時間じゃが、そこでも寝る。だから起きているはずなのに寝ているのだから、これは冬眠だ」

「そうなんですか」

「まあ、冬に眠ると冬眠かもしれん。夜でも昼でも」

「それはないと思いますが」

「うむ」

「夢の中に出て来る妖怪はどうでしょうか」

「それは、以前やったのではないか」

「いえ、一匹とは限らないでしょ」

「夢か、それは何とでも言えるが、最初から形もない夢の世界での妖怪では大差ないだろう」

「大差とは」

「うむ、どちらも夢なのじゃ。やはり現実と絡んでこそ妖怪も生きる。夢の中に現れる妖怪など、夢の中で夢を見ておるようなもので、やはり絡みがないと駄目だ」

「誰もいない草原に、妖怪がぽつんといるとかですね」

「そうそう、草原でも野原でもいい、これは現実のものじゃ、そこに混ざり込んでいるからいいのじゃ」

「しかし、最近は原っぱなど、あまりありませんねえ」

「何も使われておらん空き地に、草が伸びたような場所じゃな」

「そうです。山の中に行けば原っぱは多くあると思いますが」

「あるのう、木が生えておらん。草ばかりの場所。草原かな。何故にも木が立っておらんのような禿げ山じゃ。その近くの山はびっしりと木が生え茂っておるのになあ。その禿げ山、木が枯れたわけじゃない。何故か木が恐れてそこで芽を出そうとせん。鳥や風が種を運んできているはずなのだが、駄目なんだ」

「人が生やさないようにしたのではありませんか」

「いや、そんなことをしても使いようのないような山じゃ」

「博士はそんな山を見られたのですか」

「ああ、若い頃なあ。ぽつんとそんな山があったのう。ゴルフ場かと思ったわ」

「それは地質の関係かもしれないねえ」

「そこだけなのう」

「はい」

「世の中にはそういう地所が街中にもある」

「そうなんですか」

「草も生えんような場所じゃ」

「生えるでしょ。雑草ぐらい」

「そういう意味ではなく、どんな店が出来ても、流行らんのだ」

「ああ、ありますねえ。とっかえひっかえ店が出来ると、どの店も撤退、撤退。これは地霊でしょうか」

「地下水や、悪い風の通り道かもしれんのう」

「それは風水ですね」

「地霊ではないにしても、ややこしいものが発生しやすい場所なのじゃ」

「それは何でしょう」

「さあ、何か嫌がるような空気があるのだろうなあ」

「誰が嫌がるのですか」

「店屋なら客だ」

「そうなんですか」

「しかし、周囲の建物を取り払っても、まだ怪しいとなると、地層や地下水かもしれん。また悪い風の通り道でな」

「風の道があるのですね」

「日本全国至る所に、何々風という風がある。季節風だろう。その土地の地形で独自の流れも加わる」

「しかし、なかなか妖怪の形になりませんが」

「特異な風ではないからじゃ」

「博士、そろそろ冬眠から起きて下さい」

「ああ、そのうちな」

了